

第24回国際視野画像学会に参加して

進歩的な街・バークレーで 最先端の話題を熱く議論した4日間

2022年8月10日から13日。サンフランシスコ湾東岸の都市・バークレーで「第24回国際視野画像学会 (Imaging and Perimetry Society Conference : IPS)」が4年ぶりに現地開催されました。



感染で旅程変更になった場合の旅行保険などが必要となりました。また、海外学会専門の旅行者の指示通りに準備すると意外と簡単に済みましたが、しかし、一緒に参加するはずだった先生方のうち約半数がコロナ感染または濃厚接触者となり参加できなくなる事態となりました。私

コロナ禍での海外学会

パンデミックによって延期されていた「第24回国際視野画像学会 (Imaging and Perimetry Society Conference: IPS)」が、今年ついにカルフォルニア州のバークレーで現地開催となりました。コロナ禍前からするとワクチン接種証明書アプリ、コロナ



鹿兒島大学
客員教授
山下 高明
やました たけひろ

は幸いにも感染せず3年ぶりの国際学会参加を果たすことができました。アメリカの学会はなぜか日本の長期休暇と同時期に行なわれることが多く、今回もお盆の時期で、日常診療にはほとんど影響ありませんでした。こんなことを言うとワーカホリックと思われるですが、実は逆で、1週間も休みにするとそのしわ寄せで前後の週が大変な混雑になるので、お盆の時期の開催は本当にありがたいのです。

開催地アメリカへ

幸先よく、エコノミークラスで予約していた航空券がオーバブックイングのためビジネスクラスにアップグレードされ、初めての広い空間とおいしい食事で快適なアメリカへの旅となりました。私は英語が大の苦手ですので、久しぶりの入国審査で戸惑ってしまいましたが、若干怪しまれながらもなんとか通過することができました。

到着初日の昼食では久々でアメリカンサイズを失念しており、パスタセットを人数分注文したところ、夕食が食べられないほど満腹になってしまいました。アメリカの物価高と円安の影響で、コロナ禍前の1.5倍程度の値段となっていました。パスタの量を考えるとむしろ妥当か

もしれません。

アメリカで開催される野球の試合や国際陸上のテレビ中継を観ると、野外的なためほとんどの人はマスクをしていませんが、アメリカでも室内での調理、接客、会議の場面ではマスクを着用している人が多く、少し驚きました。地域にも異なりますが、アメリカ人にもマスクは感染予防に有効であることが理解されてきたようです。

国際視野画像学会の特徴

国際視野画像学会は建設的な議論ができる洗練された研究者が集まるのが特徴で、和やかな雰囲気ですが高度なディスカッションが飛び交います。ほぼすべてのセッションで議



鋭い質問に鹿児島弁なまりの英語でなんとか返答している私

論が尽きないため、休憩時間にも個々で議論することもしばしばです。

視野の発表が多い中、私は画像の研究者で、しかも「思春期前後における眼底パラメータによる性別判定率の上昇」という突飛な内容でしたので、質問は少ないと予想していましたが、鋭い質問が次々に発せられ参加している研究者のレベルの高さを再確認しました。

以前は名称が「国際視野学会」でしたので、発表もほとんど視野関係でしたが、最近では名称が「国際視野画像学会」に変わり、動物を用いた基礎研究者や私のような画像の研究者も参加するようになったため、多彩な発表を聞くことができます。

若手の先生方にはゆっくり丁寧に質問してくれますし、答えられない場合もヒントや回答を他の研究者が教えてくれますので、国際学会で口演デビューの先生には最も適した学会かもしれません。このように議論しやすい雰囲気もあり、若手の先生方は多彩な質問にも自身で適切な回答を返していました。

今回のハイライト

学会のレクチャーではオーストラリアの Allison McKendrick 先生が視野測定で視標の大きさや提示時間などをさまざまに変えることで結果に

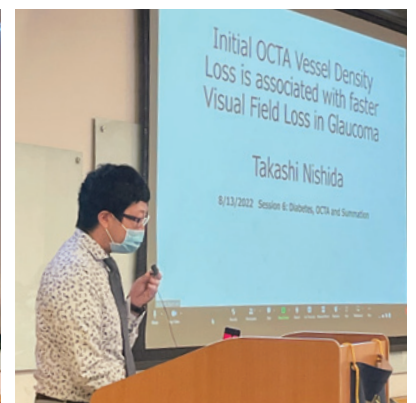


Allison McKendrick 先生の Business Meeting



次回(2024年)会場の紹介

どのような影響があるのかを分かりやすく解説してくれましたので、私のような専門外の研究者でも視野検査の奥深さを理解することができました。カール・ツァイス社で長らくハンフリー視野計の開発に携わって



西田崇先生の発表



共同演者としてWEBで参加の松本長太先生

こられた Vincent Michael Patella 先生は国際視野学会とハンフリー視野計の歴史を話してくださいました。私は歴史から学ぶことが大好きですので、学会では眼科学の歴史の講義はなるべく聴講するようにしています。視野計がどのように開発・製品化され、どのように世界に広がっていったのかを知れば、新しい研究をどのように世界に広めていけばよいかのヒントがたくさんあるのです。視野計も研究の最初はほとんどの



会場の中庭、奥の建物で講演、右の建物の1室が器械展示およびランチョンセミナーの会場

方から無理だとか意味がないとか言われていましたが、少ないですがその価値が分かって応援してくれる人がいました。その素晴らしいチームと国際視野学会での各国からの研究発表の成果によってそれまで世の中に無かった新しい物、自動視野計を作り出したことを興味深くお聞きしました。

ランチョンセミナーでは朝岡亮先生が視野の信頼性や、人工知能による視野の検査時間短縮や予測に関する解説されていました。朝岡先生は英語が堪能なうえに、講演の構成が

優れているので、人工知能に詳しくない先生方も集中して聴講していました。国際視野画像学会の現プレジデントである近畿大学の松本長太先生は日本からWEBで参加されました。時差の関係で日本は真夜中でしたが、疲れも見せずに発表され、皆さんからたくさん拍手を受けていました。

その他にもグーグル社で緑内障専門医として初めて採用されたNaama Tamari先生の画像解析に関する発表、基礎研究者で眼圧による眼球の変形を研究されているBrad Fortune先生など、どれも私の脳の領域を拡大してくれる初めて聞くような素晴らしい発表が目白押しでした。

現地での交流

アメリカに留学中の先生方とも交流することができました。現在留学中の先生方の大半は留学先を自分で探しており、期間も3〜5年程度と長く、成長戦略を主体的に決めていくところに世代の差を感じました。われわれの世代は事情をあまり知らないまま上司の勧める研究室に1〜2年留学して帰ってきていた方が大半だと思います。

最近ではWEBでの学会が開催されたり、世界や学問の情報がネットを通じて手軽に得られるようになった

りしたことで、忙しくても情報収集が容易になったことが要因だと思っています。特に驚いたのが、留学中の先生が初めての国際視野画像学会で質問もしていたことです。現在留学中の若い先生方は英語も得意で、積極性もありますので、日本に帰国した後、自分のやりたいユニークな研究を行なうことができれば、日本の国際的なプレゼンスが今後は徐々に上昇すると感じました。

ディナーパーティー

国際視野画像学会の最終日には、ディナーの時に各国が歌を披露します。スイスは前回、長いホルンをわざわざ持ち込んでわれわれを驚かせましたが、今回は逆に小さなピッコロでの演奏を披露してくれました。

イギリスは自虐ネタの替え歌、オーストラリアはピアノ演奏をバックに演劇風の替え歌、アメリカは視野の専門用語を使った替え歌、各国とも歌がうまい人も下手な人もとにかく久しぶりの国際学会を存分に楽しみながら歌っていました。

日本からは朝岡亮先生がピコ太郎に扮して、われわれはアップル、パインアップルの衣装を着て、ペンの役を他国の先生方に振ったりしながらPPAPを踊りました。私が学生の頃は同じような価値観の人たちと盛



最終日のディナーでPPAPの替え歌を披露、笑いをとることができました



Travel Grantの授与式
左端が西田崇先生、右端が杉野日彦先生



左から聖隷浜松病院の朝岡亮先生、留学中の後藤聡先生、私、留学中の西田崇先生、近畿大学の杉野日彦先生、視能訓練士の藤野友里先生

り上がっていたのが、今はサンフランシスコで視野に興味があるという共通点がありますが、価値観、世界観の大きく異なる世界中の研究者と一緒に踊ることができていると思うと不思議な気分になりました。

ディナーの最後には、若手の優秀演題表彰式がありました。国際視野画像学会では日本人も優秀演題に選ばれることが多く、今回の参加者では朝岡先生、藤野友里先生も過去に

表彰されています。

幸せな研究人生

今回、久しぶりの国際学会参加で、研究者としての自分が本当に幸運であつたと感じました。36歳でイギリスに留学した際に、初めて時間をかけて何度も論文を読み込むことで、筆者の考えに限らず、研究の方向性、思い描いている未来を想像することができました。さらに多数の眼底写真をじっくり眺めていると、正

常眼でも眼底に大きな個人差があることに気がきました。

日本に帰って、坂本泰二教授に正常眼の研究をしたいと話した時に「私には正常眼を研究して何の意味があるのかよく分からないが、山下先生が興味を持ったことを存分に追究したらいいよ。それが研究だから。研究費が足りなかつたら私が何とかするし、英語が分からなければ私がサポートするよ」とのお言葉を頂きました。

正常眼の研究は、以前は解剖学においては剖検眼で盛んに行なわれていましたが、当時は盛んではありませんでした。正常といったも皆同じではなく、眼底写真をよく観察すると分かりますが、ひとつとして同じ眼は

ありません。たくさんの特徴がありますが、必ず個人差があつて、その極端な形が異常となつて現れる病気が多いのです。正常眼の分布や傾向を理解するための統計学をイギリスで学んだことも正常眼の研究に適していました。

正常眼の研究は知らない人には意味が分からないので、論文を通すことも一苦労ですが、丁寧に説明してひとつひとつ論文を書いていくと、真実であれば少しずつ広がっていきます。13年間それを続けて49歳になつて思うことは、自分の予想した人生よりもずっと素晴らしい人生になつたということです。自分の知的興味で自分自身の手で少しずつでも解明できることは本当に幸せなことです。学会の最終日に人生が終わるかもしれないようなこんな感想を抱いたのもコロナ禍ならではの出来事かもしれません。

コロナ禍の入国

学会開催時は日本入国の際にPCRでコロナの陰性証明が必要でした。学会ではディナーの時さえ極力マスクをしていましたが、むしろ日本で罹患している可能性もあり、ドキドキしましたが、幸いなことに日本からの参加者全員が検査結果は陰性でした。帰国時はスマートフォン

アプリに事前に必要情報を入力しているのと顔認証装置の効果であつという間に入国することができ、これぞデジタルトランスフォーメーションだと感じました。

若い先生方へ

最後に先輩としての助言をさせていただきます。新しいことを発見したり、発明したりしたいと思っている若い先生方は、専門用語と臨床統計を教科書で勉強してから、国内そして国際学会に積極的に参加してみてください。専門用語と統計さえ理解していれば、次から次に頭の中に世界中の素晴らしい研究者の考えが整理されて入り込んできます。

そして、どんな研究も嘘でなければ、すべての発表が必ず何かの役に立ちます。インターネットが発達していくら情報がネット上にあつても、結局考える時は頭の中に入ったことからしか考えることはできません。それが広く、深いほど、眼科だけでなく世界をより正確に理解できます。そして今までの研究者が成し得たように、素晴らしい未来を手繰り寄せることができるはずですよ。皆さんと学会でお会いしてお話しできるのを楽しみにしています。